

高等学校

平成 14 年 度

教育研究員研究報告書

芸

術

東京都教職員研修センター

平成 14 年度

教育研究員名簿

所 属	氏 名
都 立 城 南 高 等 学 校	桜 井 麻 倫 子
都 立 大 泉 北 高 等 学 校	大 内 健 太
都 立 秋 留 台 高 等 学 校	松 山 亨
都 立 清 瀬 東 高 等 学 校	戸 塚 智 子
都 立 稲 城 高 等 学 校	新 妻 春 菜

担 当

都 立 大 泉 北 高 等 学 校 長 齋 藤 眞 理

東 京 都 教 職 員 研 修 セ ン タ ー 指 導 主 事 増 田 正 弘

目 次

I 主題設定の理由	2
II 研究構想図	2
III 授業展開と評価の工夫	
1 動画（アニメーション）制作 - 15秒CMをつくる -	3
2 模写による油彩画の制作と講評会 ～生涯にわたり美術を愛好する心を育てる学習活動と評価の工夫～	7
3 「粘土と芯材で動物をつくる」を題材とした授業の実践と評価の工夫	11
4 日本画鑑賞授業 - 「日本画」って何? -	15
5 空想画『私の世界』～版画（メゾチントプレート）による	19
IV 研究のまとめ	24

実践例の概要

題材名	生徒の学習活動	評価の工夫
「アニメーション制作」 - 15秒CMをつくる -	・アニメーションの原理の学習 ・ぱらぱらアニメ制作、PCで動画の発表	○グループ・個人制作の評価の工夫 ○映像による動画表現の視覚効果で意欲をもたせる工夫
模写による油彩画の制作と講評会	・油彩画の材料・用具体験 ・原作品についての考察と模写制作、「制作ノート」への記入 ・公立美術館学芸員による中間講評、講評会 ・相互理解、自己評価	○ワークシート、制作ノート、自己・相互評価カードの活用 ○評価を学習活動に還元する実践
粘土と芯材で動物をつくる	・立体作品、素材の学習 ・写真資料をもとにしたスケッチと塑造 ・自己評価と講評会	○自己評価、講評会で制作意図を言葉で表現、本課題の確認と次回の授業への意欲につなげる工夫
日本画鑑賞授業 - 「日本画って何?」 -	・日本の古典絵画についての基礎知識づくり～班別の年表制作 ・画材体験～岩絵の具と金箔を使って文様を描く ・近現代日本画の鑑賞～パソコン画面での鑑賞	○美術を「楽しむ」ところを育てる評価の工夫 ○ワークシートによる意欲・関心や理解度の確認
空想画『私の世界』～版画（メゾチントプレート）による	・表現力トレーニング ・アイデアスケッチ、原画制作、製版、印刷 ・まとめ（自己評価票記入）	○生徒の創作活動を支援していくためのプロセス評価の工夫 ○自己の良さや課題について理解し、美術について新たに興味をもたせる自己評価票の工夫

研究主題

美術を学ぶ意欲を高め、生き生きとした学習活動を展開させ、生涯にわたり美術を愛好する心情を育てる評価の工夫

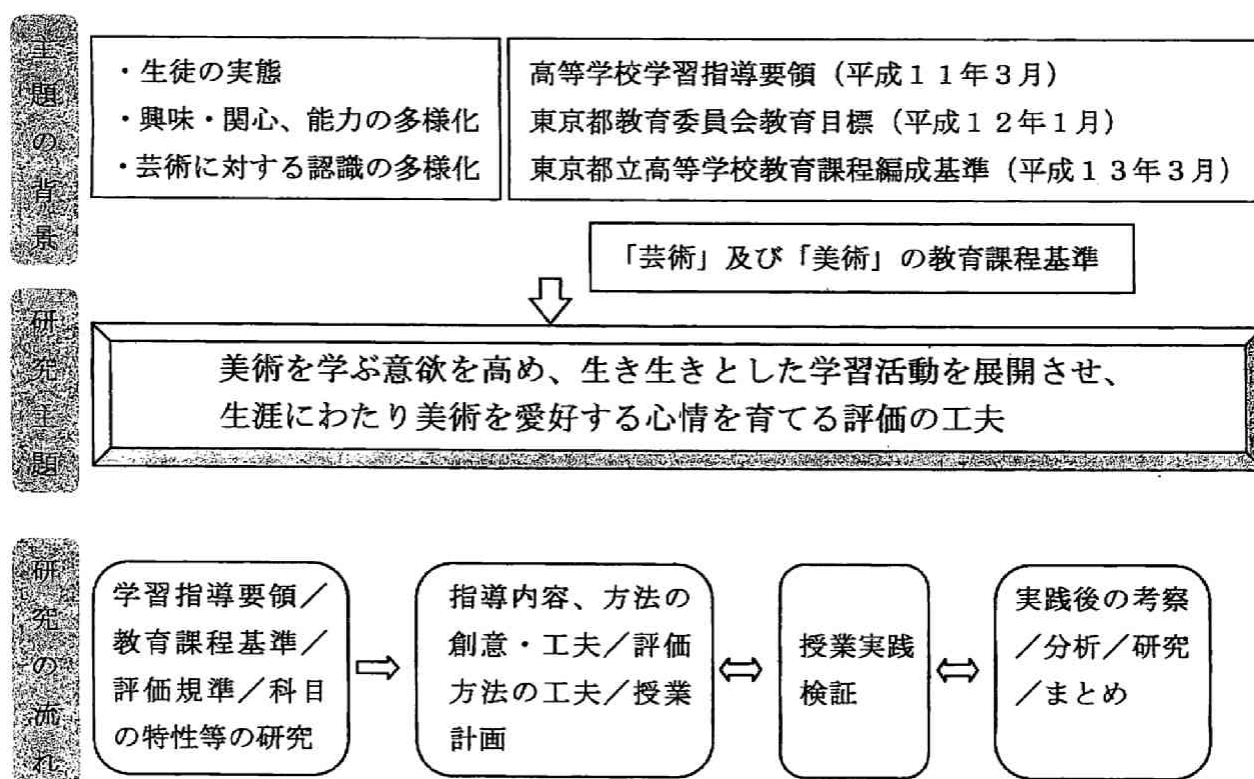
I 主題設定の理由

本研究は、観点別学習状況の評価の4つの観点（芸術では、「関心・意欲・態度」、「芸術的感受と表現の工夫」、「創造的な表現の技能」、「鑑賞の能力」）を生かした「授業と評価」の実践研究を報告するものである。

高等学校においては、従前から「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」がとられており、その評価のありかたについては芸術科美術においても、これまで様々に検討され取り組まれてきた。しかし、これまでの実績を踏まえつつも、改めて、平成15年度からの新学習指導要領の実施に伴う観点別学習状況の評価としての検討が必要とされている。

また、今日の教育的課題として、多様化した社会の中で、自ら考え自ら学ぶ『生きる力』の育成が求められている。美術では、基礎・基本の徹底とともに、「美術を学ぶ意欲を高める」「個性や美的な感性を高める」「生涯にわたって美術を愛好する心情を育てる」ことが望まれている。これに伴い本研究では、授業全体を視野に入れ、学習活動への取り組みの各場面について再点検していく。さらに、評価の在り方をとらえ直し、生徒が意欲を高め、生き生きとした学習活動を展開し、美術を愛好していく心情を育てるように工夫していくことが大切と考え、本研究の主題を設定した。

II 研究構想図



Ⅲ 授業の展開と評価の工夫

1 動画（アニメーション）制作－15秒CMをつくる－

（1）題材設定の理由

我々の生活の中においてアニメーションは、テレビやビデオ、映画、パソコンなど、身近な表現媒体を通じて、数多く目にすることができる。また、誰にでも親しまれ、特に現代の生徒たちにとって幼少の頃よりなじみのある表現方法でもある。その原理は連続する画面の残像効果によって、あたかもものが動いて見える目の錯覚を利用したものだ。絵画や彫刻、デザインなど、他の表現方法よりも直接的に「動き」で訴え、目の前で変化する表現は生徒に新たな関心と興味を引き起こす有効な動機付けになると考えた。

本題材では「15秒コマーシャルアニメの制作」と題し、仮の商品を設定し、その良さや特徴を第三者に印象づけ宣伝することを課題とした。アニメーション制作を通して、他者への意志伝達について考えさせ、客観的な視点を持ち主題に取り組ませることとした。また、情報機器を用いて制作することによって、表現手段の拡大、新たな展開を模索する。表現手段としての映像メディアが生徒の新たな創作意欲をかき立てる糸口にしたい。

（2）指導の実際

① 対象クラス 美術Ⅱ（2クラス 19/20人）

② 指導目標

- ア 自己、社会などを深く見つめ主題を生成する。
- イ 積極的に創意工夫して表現する意欲を高める。
- ウ 映像メディア機材の特質を理解し、表現意図にあった活用を学ぶ。

③ 評価の観点

- ア 主体的に取り組みながら主題を生成し、独自の視点で作品作りを行ったか。
- イ 機材の特質を理解し、創造的な表現の喜びを味わうことができたか。

④ 指導計画	ア コマーシャル、アニメーションの学習	（2時間）
	イ ストーリー作成	（2時間）
	ウ アニメーション制作	（4時間）
	エ 作品鑑賞	（2時間）

⑤ 方法

既成のアニメ制作ソフトを利用し、簡単なアニメの原理を学習した後、制作に入る。原画制作は紙に手描きとし、パソコンを使わなかった。「描く」という作業を通じ作品制作の実感をもたせることと、手描きの味わい深さをわき出させるためである。

15×20cmのトレーシングペーパーに鉛筆、マジックなどで原画を描く。15秒間のストーリーとし、1秒間に4コマ、合計60枚の原画を作成する。それを、1枚ずつスキャナーで順に入力し、画像閲覧ソフトのスライドショーで再現し鑑賞する。

(3) 学習活動の概要と評価規準

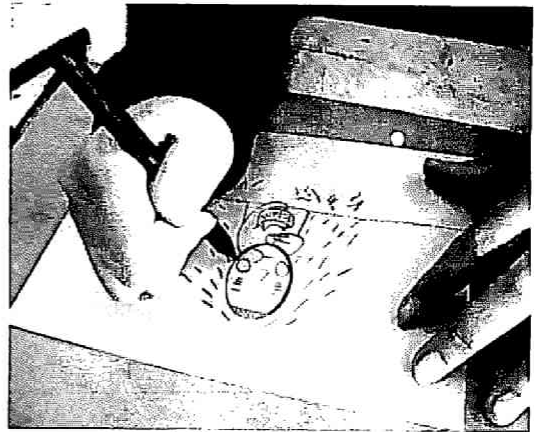
段 階 (時間数)	学習活動の具体的内容	学習活動の目標
導入 コマーシャル、アニメーションの学習 (2)	コマーシャルについての学習 アニメーションの原理の学習 ・ ソーマトロープ ・ フェナキスティスコープ ・ ゾートロープ アニメーション制作体験 アニメ作製プログラムを使い簡単なアニメーションの制作をする。	限られた時間、方法で他者に表現意図を端的に伝えることを考える。 アニメーションの原理を、説明と実習を通じて理解する。 アニメーションを作る体験をもとにし、今後の作業方法を確認する。
ストーリー作成 (2)	作業計画 作業の方法、役割の分担について考える。 ストーリーの考案 与えられたテーマについてグループで協議し、ストーリーを考案する。 お互いのアイデアをまとめ、一つの作品をつくる。 絵コンテ制作 時間枠のイメージを把握する。 表現の方法、効果について考える。	共同制作活動の中でそれぞれの役割を受け持ちながら協力して制作できるよう構想を練る。 コマーシャル、アニメをつくるための役割について考え全体の計画を立てる。 アニメーションの特質を生かしてテーマに沿ったストーリーのあらすじを考える。 決められた時間（15秒）の中でストーリーが展開できるよう時間の割り振りを構成し、全体像を確かめる。
アニメーション制作 (4)	原画制作 計画に沿って原画の制作を行う。 パソコン入力 スキャナー、デジタルカメラを使用し、原画を画像ファイルにする。 動きの確認、修正 画像閲覧ソフトのスライドショーで動きを確認し、修正、補正を行う。	決定した主題、作業計画に沿って、また、新たな発想を取り入れながら原画を制作する。 「動き」「変化」について十分配慮し色彩の効果も考えながら原画を制作する。 協力しながら、機器を正しく扱い原画を入力する。 動き・効果を画面で客観的に見つめ直し、修正、補正によって、より完成度の高い作品を目指す。
作品鑑賞 (2)	作品鑑賞、グループ作品発表、鑑賞	作品を交流、批評し合うことにより、映像表現の効果、特質を理解し、互いの個性を尊重することの大切さを学ぶ。 作品制作を通じてグループにおける自己の役割について発見する。

学習活動における観点別の評価規準・評価材料			
関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
コマーシャルについて考え、映像表現の可能性について理解しようとしている。 アニメーションの原理を理解し、意欲的、主体的に課題に取り組もうとしている。 アニメーション制作の体験を通して楽しく創造的な主題を生成する意欲をもつ。	感性や美的感覚を働かせて、良さや美しさを感じ取ろうとする。	正しくコンピュータ機器を取り扱い、アニメーションの原理を体験しながら理解する。	アニメーションの原理を理解し、過去に様々な工夫がなされたことを感じ取る。
ワークシート			
グループ内で協力しながら作品づくりに取り組もうとしている。 アニメーションの特質を生かして主題を生成しようとしている。 グループ内で協力、協調しながら作品を生み出そうとしている。 グループの中で自分の考えを伝え、相手の意見を取り入れながら作品づくりに取り組もうとしている。	自己の体験や想像をもとに主題を生成し、美しさや楽しさ、驚きなどの要素を取り入れてストーリーを考える。 表現意図と時間、動き、展開を考え、作品全体の構成を組み立てる。	アニメーションの特質や、素材、表現効果を理解し、自己の表現意図に合わせて効果的に表現する。 おおまかなスケッチをもとに主題に沿った全体の流れを確認できる絵コンテを作り、修正や新たな発想を加える。	
ワークシート	アイディアスケッチ	絵コンテ	
主題を大切に、新鮮な発想、構想、効果的な編集により、美しく表現しようとしている。 グループで協力しながら作品づくりに取り組もうとしている。 これまでの作業の積み重ねで画面が動くことに喜びを感じ、新たな創造意欲をもつことができる。	表現方法や素材、動きについて考え、丁寧に原画の制作をする。	動きや表現に留意し、素材の特性を理解しながら効果的に活用する。 機器を正しく扱い、かつ効果的な方法を考えながら原画をパソコンに入力する。 主題生成時に立ち返り全体の動き、表現方法の確認を行い、修正、補正を行う。	客観的に作品を評価し、修正ができる。
ワークシート	作 品		ワークシート
積極的に鑑賞する態度をもち、自分たちの作品について解説することができる。		鑑賞を通じて映像表現の効果、特質を理解できる。	互いの作品について自分なりに分析し、意見をまとめ発表することができる。
ワークシート			

(4) 評価の工夫

毎時ごとに意欲、関心について自己評価させ、評価資料にする。アイディアスケッチや絵コンテは全てワークシートに描かせ、提出させた後評価する。生徒が互いに評価し鑑賞能力を高めるとともに、指導者が総合的な評価を行う。

個人による制作とグループによる制作の二つの方法を選択させたが、異なる評価の観点を設け、不公平のないよう配慮した。

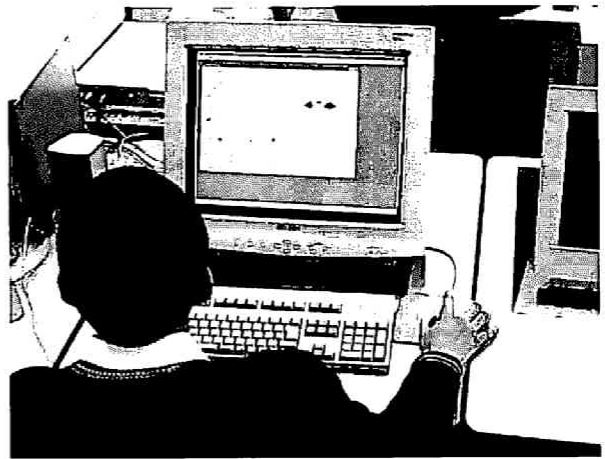
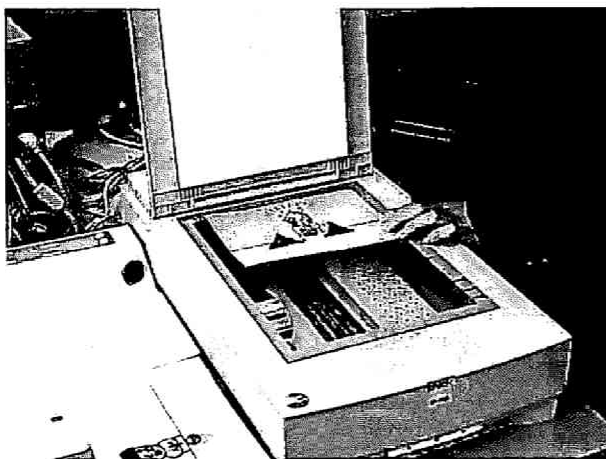


(5) まとめと今後の課題

「まる」が動く、膨らむ、弾む、増える…。パソコンで簡単にアニメを作ることができた導入での体験が生徒たちの意欲に火をつけた。自分にもできる、という自信が発想を豊かにし、創作意欲を活発にした。全10時間の時間設定は作品に深みをもたせるには短すぎる。しかし、本校の生徒の実態に照らし合わせ、できるだけ速効性をもたせることが表現の喜びを得ることの一つの要因だと考えた。すでにパソコン機器の取り扱いにおいては指導者よりもはるかに先を行く生徒にとっては、機器の操作よりも主題を生成する作業のほうが難関だ。ところが「自信」を得た生徒はまさに自信をもってこれを克服したといえる。

自己評価をさせることにより、制作段階の確認や次回の目標を生徒自身が能動的に考えることができ、また、指導者にとっても授業の様子だけでは分からなかった内面的な部分についての把握ができた。

制作方法についてグループ制作を念頭に計画を立てた。当然、指導目標に、「他者との協調性」を盛り込むことにしていたところ、積極的な意味で、独自の制作を希望する生徒が約半数を占めることになった。個人制作と、グループ制作が共存することになり、それぞれの評価の観点が異なる結果になってしまった。指導計画のあいまいさが一つの反省点となった。



2 模写による油彩画の制作と講評会

～生涯にわたり美術を愛好する心を育てる学習活動と評価の工夫～

(1) 題材設定の理由

今日、社会環境は大きく変化し続けている。多様な個性をもった高校生が、将来、社会を生きぬくためには、自ら進んで豊かな人間性を養おうとする姿勢をもつことが大切である。しかし、美術館で美と触れ合うことや自然や生活のなかの美的なものに気付くことなど、生涯にわたって潤いのある生活を送るための出会いを逃している現状がある。

本事例は、美しいものを美しいと感じ、絵画表現の基礎・基本の知識や技能を生かす表現活動を通して、美術の魅力を発見し、美的な感性を高めるため、「模写による油彩画の制作」を学習活動として取り扱うこととした。また、美と触れ合う生徒一人一人の心を豊かに創造的な諸能力として高め、生涯にわたり美術を愛好しようとする機会を作るため、公立美術館学芸員を招いての「講評会」を計画した。

(2) 指導の実際

① 題材、対象学年

模写による油彩画の制作と講評会「部屋に絵を飾ってみないか～画家…その生涯～」
2 学年「美術Ⅱ」

② 指導目標

- ア 表現活動に親しみ、表現活動を通して美術の魅力に気付く。
- イ 美との出会いを創造的な諸能力に高め、生涯にわたって美術を愛好する心を育てる。

③ 評価の観点

- ア 表現活動を主体的に取り組み、美術の魅力に気付くことができたか。
- イ 美術の魅力を個性豊かな諸能力に高め、生涯にわたって美術を愛好しようとする心としてもつことができたか。

④ 指導計画

ア 油彩画って何？	2 時間／2 × 1
イ 心をいやす作品（油彩画）探し「制作ノートづくり」	2 時間／2 × 1
ウ 絵画はいろいろなことを教えてくれる「作品制作 1」	6 時間／2 × 3
エ 中間講評会「油彩画らしさって何かな」	2 時間／2 × 1
オ 画家は何を考えて描いたのだろう「作品制作 2」	4 時間／2 × 2
カ 講評会「満足する作品が描けたかな～画家…その生涯～」	
自己評価	2 時間／2 × 1

(3) 学習活動の概要と評価規準

段階（時間数）	学習活動の具体的内容	学習活動の目標
油彩画って何？ (2)	- 参考作品から油彩画に興味・関心をもつ。 - ワークシートへ記入する。 - 試作品を制作する。 - 描画用具の取り扱い方について学習する。	- 油彩画に興味・関心をもち、油彩画の色彩の透明感や輝きに気付く。 - 油絵の具の性質と特徴を発見し、描画用具の取り扱い方を学ぶ。
心をいやす作品（油彩画）探し 「制作ノートづくり」 (2)	- 模写用の図版（カラーコピー）を観察する。 - それぞれの作品から発見した事柄を「制作ノート」に記入する。 - 模写したい作品を選ぶ。	油彩画作品の選定から美的な感性や感覚を高め、模写に適した作品を選ぶ。
絵画はいろいろなことを教えてくれる 「作品制作1」 (6)	- 選んだ作品（図版）を観察し、発見した事柄を「制作ノート」に記入する。 - 対象のアウトラインを鉛筆で模写し、油彩画の技法で描き始める。	- 原作品（図版）に描かれている対象を把握し対象の立体感や色彩、構図の安定感を感じ取る。 - 模写の方法を理解し、制作への意欲を高め、模写し始める。
中間講評会 「油彩画らしさって何かな」 (2)	- 学芸員による講評会に興味・関心をもつ。 - 制作中の作品を並べ、作品についての事柄と制作中の問題点について発表する。 - 学芸員による助言に耳を傾け、絵の具の成り立ちと油彩画技法を学び、表現活動をふくらませる。	- 学芸員を招いた講評会に興味・関心をもつ。 - 自己や友人の作品の出来栄を確認するとともに、友人の絵画の見方や描画の方法を理解する。 - 油絵の具の成り立ちや油彩画技法について理解するとともに、油彩画への興味・関心を高める。
画家は何を考えて描いたのだろう 「作品制作2」 (4)	- 油彩画の技法で制作を進める。 - 画家の創作活動を想像しながら制作を進める。 - 制作中に原作品から感じたことを書きとめ、自己の考えと比較してみる。 - 作品を完成させる。	- 模写を通して、原作品の作者の心情、作品に込められたメッセージに気づき、それらと自己の考えを照らし合わせ、普遍的なものの在り方、美について考える。 - 模写作品を完成させ、講評会へ参加する意欲を高める。
講評会 「満足する作品が描けたかな～画家…その生涯～」 (2)	- 原作品（図版）と模写作品を鑑賞し、それぞれの美しさや良さを見付け、ワークシートに記入する。 - 学芸員の話聞き、原作品の背景にある世界に興味・関心をもち、絵画や美術作品へ興味・関心を高める。 - 美術や創造的なものとの出会いを常にもとめようとする姿勢や態度を学ぶ。 - 自己評価する。	- 学芸員を招いた講評会を通して、原作品と模写作品の良さや美しさを発見し、絵画や美術の魅力に気付く。 - 画家の作品への想いや意図、歴史や文化を背負った絵画について、学芸員から話を聞き、絵画や美術作品への興味・関心を高め、生涯わたって美術を愛好しようとする心をもたせる。

学習活動における観点別の評価規準				* 評価材料 ○ 備考
関心・意欲・態度	芸術的な感受や 表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力	
・油彩画の色彩の透明感や輝きを見付けようとする。 ・油絵の具の性質や特徴、道具の取り扱い方を学ぼうとする。		・油絵の具の性質や特徴を理解している。 ・描画用具や描画材料の取り扱い方を理解している。		*活動状況、ワークシート、試作品、自己評価カード ○1 学年次などの学習状況・データを参考にする。自己評価カードは評価の参考とする。
・観察での発見を「制作ノート」に書き込んでいる。 ・模写したい作品を選んでいる。	・原作品の雰囲気や対象、対象の立体感などから作品の美しさを感じ取ろうとしている。		・原作品の図版を観察し、雰囲気や対象、対象の立体感、色彩の美しさ、構図の安定感を発見しようとする。	*活動状況、「制作ノート」 ○他教科と連携し生徒理解に努め、生徒一人一人の学習状況の観察を行う。
・作品制作への意欲を高めている。	・画家の美的な感性や感覚、豊かな表現力に共感している。	・模写の方法を理解し、描画用具を正しく取り扱っている。		*活動状況、制作中の作品、「制作ノート」 ○「制作ノート」の内容の変化を観察して評価する。(ノートの返却)
・中間講評会への興味・関心をもっている。 ・友人の作品の良いところを見付けようとする。 ・表現活動への意欲を高めている。	・学芸員による講評から自己や友人の作品の出来栄を確認している。 ・友人の描画の工夫を見付けている。	・技法上の問題や課題を見付けようとしている。 ・学芸員の助言から油絵の具の成り立ちや油彩画技法を学んでいる。	・友人の絵画への着目の仕方を見付けようとしている。 ・油彩画らしさについて考えている。	*活動状況、ワークシート、相互評価シート、自己評価カード ○講評会での発言の内容やワークシートの内容を観察して評価する。相互評価シート、自己評価カードは評価の参考とする。
・作品を完成させようとする。 ・講評会に参加しようとする意欲を高めている。	・画家の制作活動を想像しながら制作している。	・技法上の問題や課題を解決しようとする。	・作品からのメッセージに気付き、作品の主題や作者の心情について考え普遍的なものの在り方、美について考えている。	*活動状況、「制作ノート」、模写作品、自己評価カード、 ○「制作ノート」の内容の変化を観察して評価する。自己評価カードは評価の参考とする。 ○(評価票の返却)
・学芸員の話、真面目に聞こうとする。 ・絵画や美術作品への興味・関心を美術を愛好する心へと高めている。	・学芸員の話から創造的な表現活動を行うには、技術や感性、感覚、発想の豊かさが必要であると気付く。		・原作品(図版)と模写作品の美しさや良さを見付けようとしている。 ・油彩画の美しさを再発見している。 ・学芸員の話から作品に込められた作者の想いを想像し様々な背景をもつ絵画への理解を深めようとする。	*活動状況、ワークシート、感想、意見文、自己評価 ○講評会への取り組み方や質問、発言の内容を観察して評価する。自己評価は評価の参考とする。

(4) 評価の工夫

① 評価方法の工夫

ア 4つの評価の観点「関心・意欲・態度」、「芸術的な感受と表現の工夫」、「創造的な表現の技能」、「鑑賞の能力」による評価基準を設定し、生徒一人一人の学習状況を評価材料をもとに観点別に評価する。

イ 生徒一人一人の学習状況や得意とする分野などに留意し、生徒理解に努めながら生徒の個性に対応した個人内評価を行う。

ウ 生徒の自己評価、相互評価を継続して実施し評価の参考とする。

② 評価を学習意欲に生かす工夫

ア 提出された「制作ノート」に、毎時間ごとの評価と助言を記入し返却する。

イ 学習への興味・関心、学習到達度、理解度の評価を学習段階ごとに4つの評価の観点に照らして、グラフや記号を用いて表した「評価票」を返却する。

(5) まとめと今後の課題

今回の事例は、生徒一人一人が美術への興味・関心を深め、美と触れ合いながら豊かな情操をはぐくんでいくことを重点にし、指導目標や指導内容、学習形態に創意・工夫を行った。

① 指導目標では、生涯にわたり美術を愛好する心を育てるために、美術の魅力に気付かせ、美術を愛好しようとする心を養うことを重視した。

② 指導内容では、表現活動から絵画や美術作品の魅力に気付き、意欲的に表現活動を展開するとともに、美的な感性や感覚を高められるよう配慮した。

③ 学習形態では、美術を身近に感じ、美術館への興味・関心を高める取り組みとして、公立美術館学芸員との共同授業を計画、実施した。

この実践の成果として、生徒が進んで表現活動を展開し、油彩画の技能を身に付け、新たに絵画や美術の魅力を発見したことが、生徒の美的な感性や感覚を高めることにつながった。

また、公立美術館学芸員を招いての「中間講評会」や「講評会」を設定し、生徒が自己や他者の個性を発見し、再確認することで、生徒自らが絵画を様々な視点から鑑賞する能力を深め、美術の多様な楽しみ方に気付き、今後の表現活動や鑑賞活動への生徒の意欲を高めることができた。さらに、現実には美術館に勤務する職業人の方から実際に話を聞き、美術館の役割や取り組みを学んだことで、生徒から生涯にわたり美術や美的なものを愛好し続けていきたいと願う声が聞かれた。

評価などの工夫の成果は、生徒一人一人が学習活動での問題や課題を自ら進んで解決しようとする態度となって表れた。特に、評価を学習意欲に生かす試みからは、生徒一人一人の学習に対する興味・関心や美的な感性の高まりなどとしての的確に把握でき、情操面での高まりを育成するのに役立てることができた。

今後の課題としては、生徒の学習の達成感などを適切に評価し、学習意欲に還元していくことを検討するとともに、美術館で美と触れ合うことや自然や生活のなかにある美しいものに気付くことが日常的にできるよう指導計画を創意・工夫し、生徒一人一人の学習活動が心豊かな生き方へと高まる指導を継続していきたい。

3 「粘土と芯材で動物をつくる」を題材とした授業の実践と評価の工夫

(1) 題材設定の理由

最近では駅前に彫像が設置されるなど、身近で鑑賞する機会も多い彫塑作品について、素材・制作方法について学習し、作品鑑賞と制作を通して立体の特徴・美しさについて学ばせたいと考えた。自らの制作のなかで彫塑ならではの造形要素＜多方向からの鑑賞、マッス、ヴォリューム、ムーブマン、デフォルメ、素材とその役割、作業工程など＞を理解させる。テーマを「動物」としたのは姿形が愛らしく興味・関心をもちやすいので愛情をもって制作することができること、動きを彫塑であらわすにはどのようにすればよいかを考えさせるのに適していること、台座の部分をその動物にあった環境を考えさせ造形させることにより、動物の生息環境についても思考を広げていくことができると考えたからである。

(2) 指導の実際

① 対象クラス 美術Ⅱ（4クラス・3講座）

② 指導目標

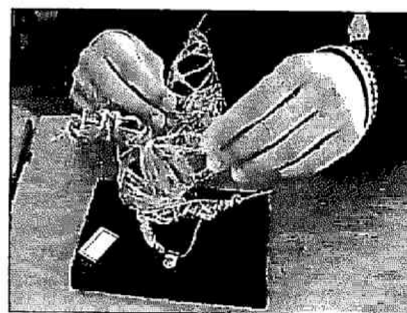
- ア 彫刻・塑造の作家・作品・素材及び造形要素を理解し、良さや美しさを感じ取る。
- イ 動物の形態、構造、動きを学び、生態や環境についても考察し、関心を深める。
- ウ 自分の制作態度や作品を客観的に評価する姿勢を育てる。また、友人の作品を評価し、他者への尊敬の心をもつ。

③ 評価の観点

- ア 彫塑についての知識・理解を深め、意欲的に課題に取り組むことができたか。
- イ 自己と他者の作品を客観的に評価し、尊重する心をもつことができたか。

④ 指導計画

- ア 導入 彫刻と塑造の解説（1時間）
- イ スケッチ（2時間）
- ウ 芯材の組み立て（2時間）
- エ 粘土（硬質つち粘土）による肉付け（10時間）
- オ 仕上げ・着色（2時間）
- カ 自己評価・講評会（2時間）



写真資料を見ながら自分が制作する動物を決め、スケッチする。動きやプロポーションを考え、芯材を組み立てる。

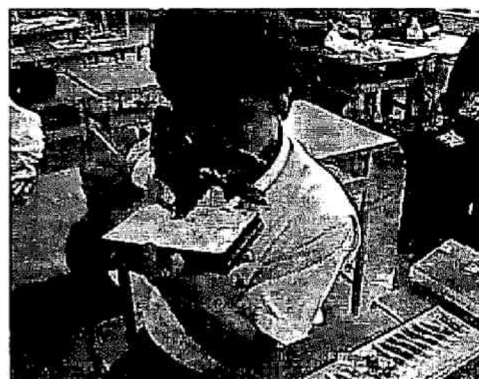
(3) 学習活動の概要と評価規準

段 階 (時間数)	学習活動・内容および指導上の留意点 (☆で表記)	学習活動の目標
導入 彫刻と塑 造の解説 (1)	・高村光雲、マリノ・マリーニなどの作品を鑑賞し、作家、作品、素材、技法、デフォルメなどについて学ぶ。 ☆身近で見られる彫塑作品を紹介。	・彫刻や塑造（以下「彫塑」）作品についての理解を深める。材料などの知識を学び、作者の制作意図を理解する。写実的な表現とデフォルメについて学ぶ。
スケッチ (2)	・立体制作のためのスケッチであるという意識をもち、いろいろな角度から観察してスケッチする。場合によっては推測して描く。おおまかなマスの把握と細部の描写、両方を描く。 ・資料をもとにスケッチした後、その動物らしさを強調できるようなデフォルメを考えて描いてみる。 ☆できるだけ動きのある表現を目指す。	・興味をもった動物をよく観察し、身体をつくり、表面の質感、動きの特徴を発見し、美的な感動を得て、制作への意欲を持つ。 ・動物のかたちを美術作品として制作することで、芸術への興味や動物への愛情をより深くする。 ・写実的な表現とデフォルメについて理解したうえで、自らが制作する方向性を選択する。
芯材の組み立て (1)	・動物の体の骨格・構造を理解し、それに応じて芯材を組み立て、麻縄を巻く。 ・全体のバランスをいろいろな方向から見て確認する。	・動きを感じさせるポーズを決定し、芯材と台座の構成を決めた上でバランスよく組み立てる。 ・関節についても留意する。あわせて、身体の大きさなど、身体の比率・構造について理解する。
粘土(硬質 つち粘土) による肉 付け (10)	・スケッチ、資料をもとに粘土を少しずつ芯材に付けていく。 ・最初はおおまかに全体的な動きを意識して手で肉付けする。徐々にヘラを用いて細部を形作っていく。 ☆いろいろな角度から見ながら作るよう、適宜繰り返し指導する。 ・乾燥後、彫刻刀で削り、細部を整える。 ・その動物の生息環境を調べ、台座の表現を工夫して作る。 ・ヒビをモデリングペーストで補修する。	・塑造の手法を理解し、かたまりとして大きく肉付けする作業と細かく作る作業を段階的に行うことができる。 ・骨格、身体の構造、ムーブマンを意識して制作できる。 ・手、へら、彫刻刀、ニードルそれぞれを制作部位に応じて使い分ける。 ・彫塑作品はいろいろな角度から鑑賞されるという意識をもち、制作する際も、たえず多方向から形を確認しながら進める。 ・動物の生息環境についても関心を抱く。
仕上げ・ 着色 (2)	・アクリルガッシュで着色し、好みに応じてニスを塗る。	・動物の特徴を引き立てるような彩色を工夫し、また、動物や周辺の草や土の自然な色合いを出す工夫をする。
自己評価 ・講評会 (2)	・自己評価票に記入する。 ・作者が自分の作品についてコメントする。他の生徒は、作者のコメントを聞きながら全員の作品に対する感想を記入する。	・自分の作品を客観的に評価できる姿勢を育てるとともに友人の作品から刺激を受け、次の制作意欲につなげる。 ・作品の良さや美しさを素直に感じ取る。

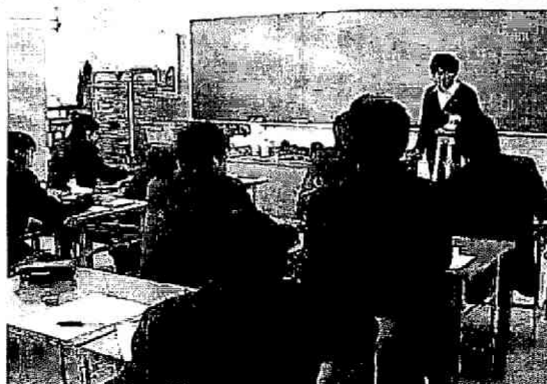
学習活動における観点別の評価規準・評価材料（＊で表記）			
関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
彫塑作品について興味をもって解説を聞き、特徴を理解する。 ＊授業態度	紹介される作品を見ながら自らが作ろうとする作品についてイメージをふくらませる。 ＊自己評価票		彫塑の美しさを感じとり、作家の意図や心情を考える。 ＊自己評価票
- 資料をよく観察し動物の形や動きの美しさについて新たな発見をしようとしている。 - 動物のおおまかなイメージをつかみ特徴を理解しようとしている。 ＊スケッチ	- 動物の生息の実態・環境についても考察し、動物・自然に対する愛情や関心を深める。 - 多方向からのスケッチの意義を理解している。 - デフォルメについて理解し、制作に生かす。 ＊スケッチ ＊自己評価票	- 生き生きとした動勢をもったスケッチをすることができる。 - マスを意識した描写と細部の作りこみのための緻密な描写の両方ができる。 ＊スケッチ	
麻縄と粘土の量的配分を考えて計画的に制作しようとしている。 ＊制作態度 ＊組み立てた芯材	- 動物の骨格・構造を意識し、全体のバランスや比率を考えて組み立てている。 - いろいろな角度から確認しながら作業する。 ＊制作態度 ＊組み立てた芯材	- 芯材・麻縄・台座の役割を理解し適切に組み立てができる。 - 安全に留意して作業できる。 ＊制作態度 ＊組み立てた芯材	
- イメージを大切にしながら粘土で肉付けをしている。 - 試行錯誤しながら制作することができる塑造の面白さを感じている。 - 最後まで丁寧に作業することができる。 ＊授業態度	- 塑像のもつ強さ、量感を意識した制作を心がけている。 - おおまかな肉付けから細部へと段階的な作業をすることができる。 - 動物の生息環境についても考え、台座部分まで効果的な表現を工夫している。 ＊粘土を付け終わった作品	- 部位・段階に応じた道具の使い分けができる。 - 表面の質感の表現を工夫することができる。 - 素材や表現にもこだわって、台座制作ができる。 ＊粘土を付け終わった作品	
興味をもって最後まで丁寧に作業できる。 ＊授業態度	自然な色合いを作り出す混色を考え、美しく着色及びニス塗りができる。 ＊完成作品	- 混色の工夫ができる。 - 気泡をつくらぬよう適切にニス塗りができる。 ＊完成作品	
自己の制作態度や自分の作品、友人の作品を評価し、記述できる。 ＊自己評価票 ＊コメントカード			作品を鑑賞し、共感したり美しさを感じることができる。 ＊コメントカード



少しずつ粘土をつけていく



ヒビを補修後、着色



講評会（作者のコメントを聞きながら感想を記入する）

（４）評価の工夫

- ① 今回対象とした生徒には、これまで「自己評価」を実施したことがなかった。今回、自己評価と講評会（それぞれが自分の作品についてコメントする、全員の作品についてコメントを書く）を行うにあたり、導入の段階から「こういうことを考えながら制作するように」など、随時説明を繰り返し自覚を促しながら授業を進めた。
- ② 生徒の自己評価は練習の一段階として考え、自己評価票と講評会でのカードの記述は生徒の意欲・関心度の目安として扱い、その数値をそのまま評定に加えることはしない。生徒が自分なりに工夫した点や力を入れた部分を自己評価票に記入させ、その評価票を用いることで、講評会で話す内容を事前にまとめられるようにした。
- ③ 自分の成果を発表し、周囲から評価を受けることで、自信をもち、次回の授業への意欲をかき立てられるように考えた。それと同時に、他者の作品を尊重する心をもたせたいと考え、それを意識した講評会の進行を心がけた。

（５）まとめと今後の課題

彫刻・塑像作品のうち、主として塑像をテーマに鑑賞・制作・講評会を行った。愛着のある動物がモチーフということもあり、生徒たちは皆、楽しそうに熱心に取り組んだ。その中で達成感を味わい、自分に自信をもてるような評価の方法を工夫した。自己評価票からは、生徒が完成した自分の作品に満足し、愛着をもっている様子がうかがえ、その点では「美術を愛好する気持ちを育てる」ことができたと思う。しかし、自己の理解の度合いや取り組みを過小評価する生徒が多く、自信をもたせる評価や指導の工夫が今後も必要だと感じた。

4 日本画鑑賞授業 ― 「日本画」って何? ―

(1) 題材設定の理由

鑑賞の時間はスライドなどを利用した講義形式になりがちである。実習の多い授業は楽しく参加するが、受け身的な講義に意識を集中・持続させることが不得意な生徒が多いなかで、体験的・実習的な鑑賞授業を工夫し試みた。

今回の題材の「日本画」は、生徒にはなじみの薄い分野であるが、画材や表現方法などが新鮮であると考えた。また、生徒が伝統の知恵や技に驚いたり、作品の良さを楽しんだりして学習活動を進められるよう指導したいと考えた。授業では、①班別の年表作成、②画材の実習、③パソコン画面での作品鑑賞など、生徒が主体的に取り組めるように工夫した。

評価については、生徒の関心や意欲に重点を置いて計画を立てた。毎回、自己評価などを含んだワークシートを提出させ、逐次生徒の理解度や満足度を把握する。指導者側の評価やアドバイスを、毎回ワークシートに書き込んで返却し、課題『日本画って何?』の評価の観点や考え方が明らかになるようにする。このような、コミュニケーションが生徒の学習意欲をより高めるようになることを目標に題材を設定した。

(2) 指導の実際

① 指導目標

- ア 日本の絵画の表現形式や技法・材料、歴史的背景を理解する力を付ける。
- イ 自分なりの視点をもって「日本絵画」の良さや美しさを見付け、鑑賞を楽しむ。

② 指導計画

ア 日本の古典絵画について（2時間）

- ・高松塚古壁画、源頼朝像、北斎の版画など誰もが一度は教科書などで見たことのある作品（20点）の鑑賞を通して、表現形式や技法・材料、描かれた目的などを確認する。
- ・作品の図版カードと説明カード（壁画・絵巻・屏風といった表現形式、絹本・紙本といった材料、描かれた時代背景などをばらばらにカードにしておく。）を、配布資料を参考に組み合わせていく。（5～6人の共同作業）
- ・カードを模造紙に年代順に並べ、年表を制作する。自分が共感できる作品について、感想を記入していく。最後に各班の代表者が自分の感想などを発表する。

イ 日本画材を体験し、模様を描いてみる（10時間）

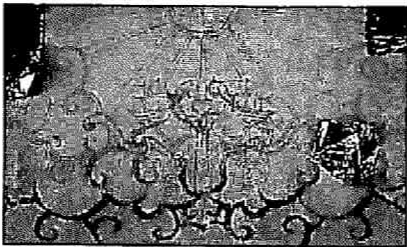
- ・日本画に使われる材料についてなどの材料の製造工程の図版資料を見せながら説明する。生徒はそれぞれの材料の特性をワークシートにまとめる。
- ・和紙・岩絵の具・金箔を使って文様を描く実習を行う。

ウ 近代・現代の日本画の鑑賞（2時間）

- ・「日本画」という言葉の誕生や近・現代日本画の多様性についての講義を行う。
- ・パソコン画面で個々に、25点の近・現代日本画を鑑賞し、伝統的な様式や美意識を受け継いでいる部分、西欧化の影響を受けている面などを分析する。また、「日本的な良さ」や「本物を見てみたい作品」についての意見もワークシートに記入する。

(3) 学習活動の概要と評価規準

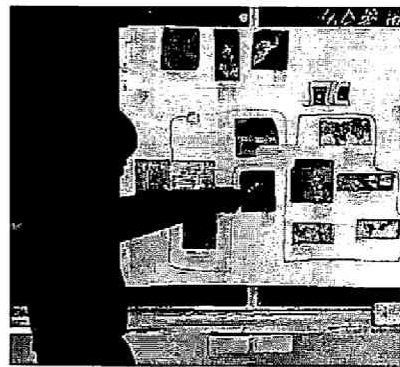
段 階 (時間数)	学習活動の内容・指導上の留意点 (☆)	学習活動の目標
日本の古典 絵画について (2)	【鑑賞1：近代以前の日本の古典絵画の概要】 ① 講義：代表的作品の紹介とそれぞれの時代背景、表現形式、「日本らしさ」について ② 作品のジャンル分けと知識の確認 ・制作年代で分ける ・画題で分ける：仏教絵画・世俗画 ・表現形式で分ける：屏風・掛け軸・絵巻物・襖絵 ・画材・技法で分ける：膠絵・水墨画・木版画 ☆代表的作品の図版カードと説明カードを、5～6人のグループであわせていく。次に、これらを模造紙に貼り付けて説明を加えながら、分類してまとめる。 (余白に個々の作品感想なども付け加える。)	・近代以前（「美術」以前）の日本の絵画作品のそれぞれの時代・場面での役割を理解する。 ・日本の伝統的絵画作品の多様な表現形式やその目的・時代背景、技法・材料を理解し自分で分類できる力を養う。 ・作品の良さや美しさを味わい、注意深く観察する鑑賞眼を養う。
日本画材を 体験し、模 様を描いて みる (10)	【表現：日本の伝統的な画材を使つての「文様」制作】 ① 画材の理解（製造工程・歴史・取り扱い注意点など） 絵の具の溶き方や金箔の取り扱いについての実習 ☆ワークシートに画材の特性や取り扱い方を整理する。 ② 画材の特徴を考慮して10～20cm四方の枠内に文様のアイディアスケッチを作成（提出） ③ 制作 スケッチの転写、下絵、金箔押し、着彩 ☆授業時間に終わらない場合放課後などの時間を利用する。	・伝統的な画材の成り立ちを理解して、古人の知恵を知り、それを敬う心を養う。 ・画材や用具を適切に扱う。 ・初めての画材に興味・関心をもち、その特性を生かし、独創的な表現を試みる。
近代・現代 の日本画の 鑑賞 (2)	【鑑賞2：近・現代日本画の鑑賞】 ① 講義：近代日本画の成立事情と現代の日本画について ・西洋文化の流入と「日本的」自我の目覚め ・近代～現代の日本画の表現形式の変容について ・現代の日本画について ② 近・現代日本画作品の図版鑑賞 ☆パソコン画面上の図版を、個々に見ながら、ワークシートにしたがって、以下の点をチェックし記入する。 ・画題や表現様式や画材について（鑑賞1）で学んだ作品との共通点と相違点について考察する。 ・作品の「日本的な良さ、美しさ」とそれぞれの好みに関して考察を深める。	・近代から現代の日本画とその時代背景との関連を学び、作家が伝統を振り返り、時にはそれを逸脱したり、西欧化させるなどして、自分の表現を追究してきたことを理解する。 ・作品の造形的特質をとらえ、分析するなどの力を付ける。 ・対象のとらえ方や表現の違い、良さなどを理解する。 ・近代日本画の成立や時代背景と変容してきた流れを理解する。
美術館見学	・東京国立近代美術館もしくは根津美術館で日本画の鑑賞をし、冬休みにレポートを作成する（冬休みの宿題）。	・実物の良さや美しさを味わう。 ・美術館で作品を鑑賞することで美術作品の社会的役割を考える。

学習活動における観点別の評価基準と評価材料（＊）		
関心・意欲・態度	鑑賞の能力	創造的な技能
・題材に興味をもって、理解しようとしている。 （＊ワークシートに講義のメモを記入・提出） ・協力して、作品分類に参加している。 ・日本の伝統的な絵画作品鑑賞を通じて日本の美術に対する自らの価値観を形成しようとしている。 （＊授業態度）	・講義のメモをもとに、作品のジャンル分けを理解して、共同で分かりやすく整理する。 （＊講義メモの提出。共同での作品群の整理方法） ・作品のもつ良さや美しさを感じ取り、自分なりの言葉で説明できる。 （＊個々の作品への感想欄・何点か選んで校内に展示する。）	
・日本の伝統的な画材に興味をもち、学習しようとしている。 ・作品を支える技術力を敬う心情を育んでいる。 ・楽しみながら制作できる （＊授業態度・提出作品・感想）	 ＊金箔押しの作業中の作品	・画材の特性や美しさを生かし、制作できる。 ・独自の表現を試みることができる。 ・画材を適切に扱うことができる。 （＊アイディアスケッチ、完成作品、作品自己採点）
・作品の鑑賞を楽しむ。 ・作者や作品に共感したり、自分の言葉で考えを伝えようとしている。 （＊授業態度、ワークシートの記入）	・日本画の美術表現を味わい、注意深く観察できる。 ・自分なりの着目点をもって、作品の造形的特質をとらえることができる。 ・日本画の表現形式の多様さを理解し、近代以前の伝統的な作品と比較対照して作品の個性を分析できる。 ・近代以降の「日本画」という制度について理解し、作品のナショナルリティについて自分なりの考察ができる。 （＊ワークシート提出）	
・作品鑑賞に集中できる。 ・公共のマナーを守って鑑賞できる。 （＊作品鑑賞メモの提出）	・主体的、積極的に自分が興味をもつ作品を見つけることができる。 （＊作品鑑賞メモの提出）	

(4) 評価の工夫

評価については、ワークシートを主な評価材にして、毎時ごとに感想や自己評価を書かせ、提出させた。また、毎時、これに指導者が評価や感想を書いて返却した。このようなコミュニケーションを通じて、生徒が評価規準を理解・納得するように努めた。

また、観点別学習状況の評価の4つの観点の中で、「関心・意欲・態度」により比重を置いた。



* 制作した年表について発表する生徒

(5) まとめと今後の課題

ワークシートには、以下のような授業についての生徒の感想が書かれていた。

ア 日本の古典絵画鑑賞

- ・ 作品の絵のカードと説明カードをあわせていくのがゲームみたいで楽しかった。でも発表する人を決めるのはもめた。
- ・ 北斎の絵が版画であるとか、燕子花図が屏風だとか、いつも教科書で見ていた作品の事情や大きさなんかを知って驚いた。

イ 日本画材を体験し、模様を描いてみる

- ・ 金箔がふわふわして、難しかったけど、頑張った。
- ・ 今回の作品は今までに使用したことのない材料だったので緊張した。
- ・ この材料を使いこなす人たちの「わざ」のすごさを感じた。胡粉の団子を百回たたきつけるのが一番盛り上がった。

ウ 近代・現代の日本画の鑑賞

- ・ 私は猿と兎の屏風の絵が好きで毛のやわらかい感じを細かく表現しているところに作者の愛情を感じた。
- ・ 僕は加山又造の屏風絵がすごい迫力だと思った。大きな屏風の絵なので、本物を体験してみたいと思った。僕は豪華なのが好きで、このデザインがすごいと感じた。日本的な美しさっていうのをよく表していると思う。

体験・実習的な面を増やすことで、生徒が生き生きと学習する姿が見られた。初めての金箔の扱いに、普段見ることのできない集中力を発揮した生徒や古典絵画の基礎知識の確認を、カルタ取りゲームの感覚で楽しんで作業する生徒もいた。

今回対象とした学年は2年生で、これまで少しずつ鑑賞の授業の割合を増やしてきた。1年生の初めに、「次は『鑑賞』の授業だよ。」と予告すると、消極的な態度を示していた生徒たちが、徐々に「鑑賞」に集中したり、楽しんだりしている姿が見られるようになってきた。このような繰り返しが、生徒が美術を鑑賞することを好きになるきっかけになると思う。

今後の課題として、ワークシートから読み取れる生徒の授業中の「関心・意欲・態度」などを、どのように評定に反映させ、生徒に還元していくか、さらに検討する必要がある。また、「鑑賞」は好きでも、自分が感じ取ったことを言葉で表現することが苦手な生徒も多い。このような生徒も自信をもって、感じたことを伝えられる力を付けられるような授業を工夫していきたい。

5 空想画『私の世界』～版画（メゾチントプレート）による

（１）題材設定の理由

空想やイメージの世界を表すような自由な表現は、描く対象がはっきりしている写生画に比べて取り留めのない印象があり、多くの生徒が難しいと感じるところであるが、指導法を工夫したり適切なアドバイスを与えたりすることによって、生き生きとした素晴らしい作品ができるものである。

メゾチント技法による版画制作は、ほとんどの生徒にとってなじみがなく、新鮮な技法として学ばせることができる。版画プレス機をくぐって作品が印刷される瞬間の緊張感や驚きなど、刷る楽しさを味わうことができるのも魅力の一つである。また、この版画特有の味わいを空想画と組み合わせることで、生徒の表現に広がりをもたせることができる。

このような取り組みを通して、生徒の持っている感性を伸ばし、表現することの喜びや充実感を味わわせ、新たな視点をもたせたいと考えた。

（２）指導の実際

① 対象学年

2 学年『美術Ⅱ』

＊ 本校美術Ⅱの２学期では、生徒の興味・関心に応じて『油彩画』、『版画』、『木彫』から題材を選択し学習する。『版画』はメゾチント技法による空想画『私の世界』の表現に取り組ませる。

② 指導目標

ア メゾチント技法による版画制作に必要な知識と技術について学ぶ。

イ 個性ある作品作りを行い、その制作活動を通して版画による表現についての理解を深める。

ウ 生徒に自分の取り組みを自己評価させることで、主体的に作品作りに必要な態度や姿勢を学ばせる。

③ 評価の観点

ア 独自の表現を追究する姿勢をもち、主体的に制作活動を展開することができたか。

イ 作品の完成を目指し、制作活動の過程を大切にしたりした取り組みができたか。

④ 指導計画

ア 導入	(2 時間)
イ プリント学習	(4 時間)
ウ 構想	(2 時間)
エ 原画制作	(2 時間)
オ 転写	(1 時間)
カ 製版	(7 時間)
キ 試し刷り、調整、印刷	(2 時間)
ク 作品の完成、まとめ	(2 時間)

(3) 学習活動の概要と評価規準

段 階 (時間数)	学習活動の具体的内容	学習活動の目標
導 入 (2)	参考作品を鑑賞する。 作品制作の説明を聞く。	参考作品から、陰影の階調が微妙に変化するメゾチント技法の特性を理解し、良さや美しさを味わう。 制作活動のおおまかな流れについて理解する。
プリント学習 (4)	『表現力トレーニング1、2』に取り組み、スケッチをする。必要に応じて図書室の図版などから取材し、参考にする。	原画を作るための素材として、いくつかのスケッチを描くことができる。
構想 (2)	原画のためのアイデアスケッチを試みる。スケッチは終わったものからスケッチブックに貼り付ける。	主題を模索しながらスケッチを編集し、構想を練ることができる。
原画制作 (2)	版画の原画を制作する。完成した原画はスケッチブックに貼り付ける。	表現したい主題を決め、原画を完成させる。
転写 (1)	トレーシングペーパーとカーボン紙を用いて原画をメゾチントプレートに転写する。	左右が逆転する版の仕組みを理解し、原画を反転させた状態で、メゾチントプレートに転写することができる。
製版 (7)	スクレーパーやバニシャーなどの工具を使ってメゾチントプレートに製版する。 必要に応じて参考作品の版を見て、彫り具合を参考にする。	メゾチントプレートの刻目を実際に確かめ、インクがどのようにして紙に刷り取られるのかを理解する。 スクレーパーやバニシャーなどの工具の使い方を理解し、実際の製版作業の中で、目的に応じて使用することができる。
試し刷り、調整、印刷 (2)	製版した版で試し刷りを行い、刷り具合を見て版を調整し、印刷する。 刷り具合を確かめながら、彫りを追加したり、インクのふき取り方を工夫したりしながら印刷を試みる。	印刷の工程について理解し、実際にプレス機を使用して印刷することができる。 印刷の過程で様々な工夫し、納得のいく作品を刷り上げる。
作品の完成、まとめ (2)	何枚か刷ったうちの1枚を選び、自己評価票の必要事項に記入し、作品の裏面に貼付して提出する。	印刷した作品を見て、刷り具合など状態の良いものを判断し選ぶことができる。 作品のもっている良さや、制作活動の取り組みの態度について自己評価することができる。 自分や他の生徒が制作した作品の良さや美しさを発見し、味わうことができる。

学習プリント『表現力トレーニング1 (イラスト編)』 《部分抜粋》

それぞれのイラストを描いてみよう。(鉛筆で、陰影もつけて立体的に描くこと)

リンゴ	花	鳥または魚	木
			
しずく	街	雲	葉っぱ
			

学習活動における観点別の評価規準（*評価素材）			
関心・意欲・態度	芸術的な感受と表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
参考作品に関心を寄せ、その作品がもっている主題や意図をくみ取ろうとしている。	参考作品を見ながら、自分の表したい主題について考え、イメージする。		参考作品に触れ、その作品がもっている良さや美しさを感じ取ることができる。 *鑑賞メモの提出
アイデアを出したり、イメージを膨らませたり、描写を繰り返したりしながら、主題をつかむための様々な試みをしようとしている。	言葉から形をイメージして描写することができる。 *プリント『表現力トレーニング』の提出	主題を表現するために、イメージをめぐらせ、スケッチを繰り返しながら画面構成をすることができる。	
主題の表現を追究する姿勢をもち、作品の完成を目指した制作活動に取り組もうとしている。	描写によって得られた“形”を様々な編集し、主題の表現に結び付けることができる。 □生徒による自己評価の観点 版の性格を理解して画面の組み立てを行えたか	アイデアを生かして、まとまりのある美しい画面を追究し組み立てることができる。 （白と黒及びハーフトーンの割り振りやバランスについて考えているか／描画や構図から主題をくみ取れるか） *原画の提出 《プロセス評価》	
用具の扱いについて理解し、安全に配慮しながら、目的に合った用具の取り扱いをしている。スクレーパーやバニシャーなどで得られたタッチや浮かび上がる絵の印象に素直に接し、驚きや喜び、表現の楽しさや難しさなどを味わいながら制作しようとしている。 □生徒による自己評価の観点 授業に集中し、良い態度で課題に取り組めたか／完成した作品は納得のいくものであったか	スクレーパーやバニシャーによる特徴あるタッチやその効果に気づき、それらを生かして用具の使い方を工夫し、主題を表現するための画面構成をすることができる。 □生徒による自己評価の観点 個性的な発想やアイデアが画面上に表れたか／アイデアを生かして、一つの画面を組み立てることができたか *自己評価票	スクレーパーやバニシャーなどで得られる特徴あるタッチの効果を生かし、伝えたい形を表現することができる。 □生徒による自己評価の観点 性格を理解して的確な作業が行えたか *提出作品と自己評価票	
作品を完成させ、制作をやり遂げた成就感を味わおうとしている。自分の取り組みについて振り返り、反省やまとめを行う。また、制作を始める前と終了した後で作品に接する態度がどのように変化したかについて考えている。 *自己評価票	完成した作品にタイトルをつける。 *自己評価票		刷り上った自分の作品を味わい、良さや課題を発見する。同時に他の生徒が制作した作品も味わっている。自分の取り組みを振り返り、総合的に自己評価する。 *自己評価票

学習プリント『表現力トレーニング2（イメージ編）』 《部分抜粋》

A群とB群の言葉を結びつけ、作品タイトルをつくってみよう。

A群	B群
楽しい／にぎやかな／さびしい／おんぼろな／かなしい／ゆかいな／あやしい／なつかしい／希望の／かがやく…	街並／木／波止場／猫／ねずみ／階段／ピエロ／虫／ドレス／花／卵／果実／くつ
タイトル決定『希望の階段』	



(4) 評価の工夫

① 評価の準備

教 員	生 徒	
中間提出物（鑑賞メモ、表現力トレーニング、原画用紙）の用紙を作成し、生徒に配布する。	中間提出物はスケッチブックの所定の場所に、取り組み順に貼り付けておく（スケッチブックをポートフォリオとして活用する）。	⇒ 制作活動など取り組みの状況を見る。
観点別評価規準表より自己評価票を作成し、生徒に配布する。	配布された自己評価票によって自己評価を行い、提出作品の裏面に貼付する。	⇒ 描写や構図、製版技術など造形的な作品の質を見る。

② 自己評価の工夫

自己評価項目	自己評点 (各 10 点)	感想や 意見
版の性格を理解して的確な作業が行えたか	点	生徒が制作中の態度も含めて自己評価する
個性的な発想やアイデアが、画面上にあらわれたか	点	
アイデアを生かして一つの画面にまとめられたか	点	
授業に集中し、良い態度で課題にとりくめたか	点	
完成した作品は納得のいくものであったか	点	
教員記入欄	教員評点 (各 10 点)	作品評価 A～D
版の特性の理解	点	教員が作品について評価する
製版的的確さ	点	
アイデア・イメージを具体化する力	点	
作品の絵としての完成度	点	

生徒は自己評価票に制作の過程も含めた自己評価を記入するが、指導者は描写や構図、製版技術など造形的な作品の質についての評価を記入する。取り組み時の姿勢などの改善すべき課題は、例えばプロセス評価時など、別途評価の機会をつくって指摘する。

生徒の自己評価項目の観点に対して教員記入欄の観点の表記が違うのは、作者として作品をつくる側と、それを評価する側では観点や感じ取り方が違うということも学ばせたいからである。（美術Ⅰでは、自己評価の観点と教員記入欄の項目を同じにしている。）

いずれの項目も観点別評価規準表より項目を作成・設定する。

③ 授業での評価の実際

長期にわたって取り組む課題なので、生徒の集中が途切れないように、授業中はできるだけ生徒の作業の進み具合に目を配った。プリント学習のところではほとんどの生徒が楽しそうにアイデアスケッチを繰り返していたが、いくつかのスケッチを組み合わせ、構想を練り、原画を制作する段階では、その作業ができる生徒と、手が止まってしまって新しい展開になかなか入れない生徒とに分かれた。

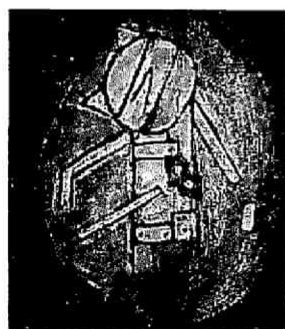
これは、異なるスケッチを組み合わせる経験に乏しかったり、レイアウトを工夫することに慣れていなかったりすることが原因であると考えられる。このような戸惑いやつまずきの程度は生徒によって個人差があるが、状況に応じて個別指導し、生徒の表現の良いところに気付かせ、自信をもたせるようなアドバイスをしよう心がけた。

スケッチブックには作業の終わった『表現力トレーニング』などの学習プリントを貼付さ

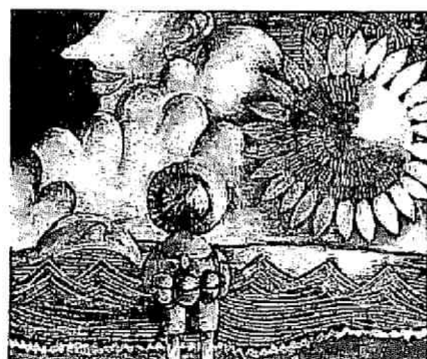
せ、そこへプロセス評価として、授業中に気付いたことやスケッチから受ける印象を簡潔に書き込んだ。生徒は互いにどんなコメントが書き込まれていたか見せ合って、そのことについて嬉しそうにしている様子が見えた。これは学習に対しての生徒の集中を維持する上で効果があった。

《作品例》

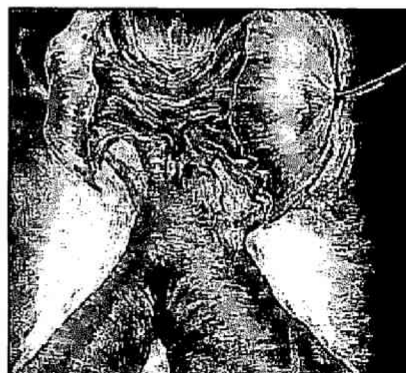
『おんぼろな猫』



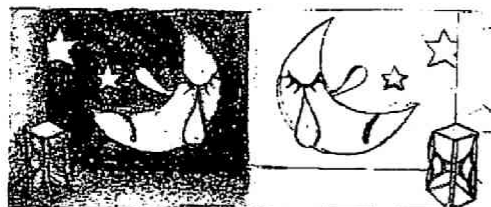
『夏の思い出』



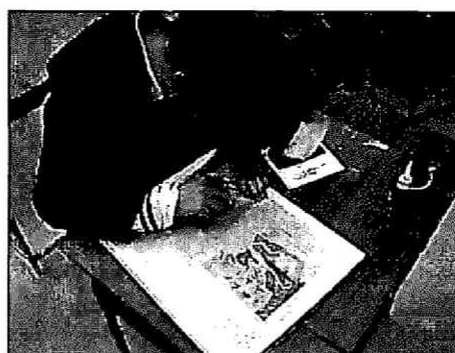
『不思議な木』



《原画とトレース》



生徒の製版作業



(5) まとめと今後の課題

本研究の取り組みを通して、ほとんどの生徒はアイデアスケッチから製版、印刷までの変化に富んだ制作過程を生き生きと展開した。生徒にこのような多様な経験をさせることが、芸術を学ぶ意欲を高め、生涯にわたって美術を愛好する心情を育てるものと考えられる。

今までも一つの作品を完成させる過程で、生徒の反応を見ながら指導者が細かく助言をすることで授業を進めてきたが、今回スケッチブックにプロセス評価を書き込むことによって、生徒は指導者のアドバイスを今までとは違った形で受け止めたようである。今後もこの指導法について研究を重ねて、工夫したい。

評価を研究することは、これから展開する授業の根本を再点検し、見直す作業を行うということである。実際、授業の準備段階では、教材の準備にはもちろん、評価規準の点検や指導計画の見直しにより多くの時間と手間がかかったが、評価について考えることは、指導者としての姿勢が問われるものであるということを再認識した。

Ⅳ 研究のまとめ

1 研究の成果

観点別学習状況の評価を基本とし、それぞれの工夫を取り入れた各校の実践で各研究員から以下の意見がだされた。

- (1) 自己評価の活用によって指導者が生徒の学習状況を把握するにとどまらず、生徒自身にも学習目標を明確に伝えることができ、また、表現技法の習得に偏ることなく内面的な学習経過に目を向けることができた。共同作業による制作の評価規準について、さらに検討する必要がある。
- (2) 市民講師の活用によって学習活動を新たな視点で展開でき、生徒の美術に対する意識を深めることができた。また、細部にわたり評価規準を検討したことで、生徒の学習状況を的確に把握できたと考える。今後も、美術館見学など地域との交流を進め、生徒自らが生き生きとした学習活動を行える授業の実践に取り組んでいきたい。
- (3) 題材に興味をもって意欲的に取り組んだ生徒が多く、各自のこだわりや工夫が表れたものができあがった。しかし、作品についてあまり自信がもてないでいる生徒もいたので、指導の過程や評価の中でさらに工夫を重ね、意欲的に取り組んだ結果について自信をもって自己評価できるようにさせたい。
- (4) 「日本画鑑賞」では、鑑賞と同時に生徒が能動的に活動できる場面を増やすことで、楽しみながら生き生きと取り組ませることができた。体験的学習を取り入れることで鑑賞に対する意欲・関心を高められることがわかった。また、ワークシートなどで評価の観点を生徒に明示することで、生徒が学習の目標をより具体的につかめたと考える。
- (5) 指導者がプロセス評価をすることによって、生徒は創作活動に必要な一定のレベルの集中を維持できた。また、生徒が自分の取り組みについて自己評価することによって、自己の良さや課題について深く考えるようになり、新たに美術について興味をもつようになった。

2 今後の課題

学習活動における「評価」は、生徒はもとより指導者の授業に対する取り組みを再点検、見直すための作業である。我々は生徒の能力、個性を伸ばす観点に立ち、「学ぶ意欲」を高め「生涯にわたり美術を愛好する心情」を育てる授業の計画の工夫と改善を図らなければいけない。本研究では観点別学習状況の評価の4つの観点について評価規準を明確にし、学習全体が明瞭なものになるよう考えてきた。しかし、評価を行う上で「明らかなもの」に対し「そうでないもの」「目に見えないもの」をどのように評価するのかについてさらに改善を求められることだろう。また、種々の工夫により得た評価をどのように評定に反映させ、生徒に還元していくのか、さらに検討していく必要がある。

新学習指導要領の実施に伴い、今後「評価」についての開示が求められると考える。誰が見ても納得できる方法、理論、実践を行うことができるかがこれからの課題になってくる。